豫州三津屋一色右馬三郎重之家系図

一色氏は清和源氏義家流足利義氏の惣領足利三郎宮内少輔泰氏の七男公深を祖として三河の吉良荘一色村（現・愛知県西尾市一色町）を領知していたので、一色姓を称する。母は櫻井判官源氏玄の女、一色宮内卿公深公は後に剃髪して一色阿闍梨と号する。

一色右馬三郎範之(後の重之)は、第九代丹後守護一色左京大夫義員(義道)の三男。母は豫州宇摩郡の河野(村上)通泰の女。

まるにふたつびき
丸に二つ引き

清和源氏義家流足利支流一色氏

第五十六代 清和天皇 880年没 — 第六王子 貞純親王 916年没 — 源氏初代 源経基（経基王） 957年没

源満仲 997年没（源満仲像 兵庫県川西市（摂津））

三男 頼信 1060年没 — 源頼信

頼義 1082年没 — 義家（八幡太郎義家） 1105年没 — 義国（足利式部大夫） 1155年没 — 足利義康（源義康） 1157年没 — 足利氏初代

義兼 1199年没 — 三男 義氏 1254年没 — 泰氏 1270年没

足利氏初代 — 左京大夫（足利公深）七男 一色公深 1319年没

宮内少輔・九州探題 — 四職 三河・若狭守護大名 頼行 — 範氏 信氏 1369年没 — 範光 範房 1388年没 — 三河・若狭守護大名 詮光 詮範 1406年没 — 初代丹後守護 満範 範貞 1409年没 — 二代丹後守護（義範） 義貫 持信 1440年没 — 兵部少輔 直氏 義遠 正照 — 兵部少輔 義長 — 式部少輔 直長

九代丹後守護 一色左京大夫義道 義員 1579年没 — 宮内少輔 義辰 昭辰

三男(後に重之) 範之 — 修理大夫・竹野郡代

十代丹後守護 一色左京大夫五郎義忠 治兵衛 義定 1582年没

豫州三津屋一色右馬三郎重之家系図

豫州三津屋重之流一色氏始祖 一色右馬三郎範之(重之) 天正八年伊豫国へ来る 文禄四年長福寺において剃髪 西月と号す

一色右馬三郎重之 1611年没

慶長十六年九月二十一日 菩提寺は東海山長福寺 墓は三蔵院宝積寺 後に旭新開墓地へ移転

周布村代官(三谷) 周布村(村長) 一色右馬助重直 後に喜兵衛 室は紅旭妙秋大姉

嫡男 重直 1639年没

大阪冬の陣大阪城籠城 元和元年五月八日 従兄弟の重光らと二百余名を率いて五月十二日兵庫着岸 令戦 大坊寺内討死(墓は大坊)

周布村代官 周布三谷庄屋の祖 三男 重光 1614年没

大阪冬の陣大阪城籠城 夏の陣で大坊寺内討死 元和元年五月十二日摂津兵庫 墓は尼崎

木屋の祖 長女 1675年没 1663年没

二神善右衛門 北条風早から重次の希望で養子

重元

二女

重勝 1675年没

周布村代官 周布村庄屋・後に弥五郎 三男 重虎 1597年没・病死

周布村庄屋・後に弥兵衛 室は旦ノ上村 青野六大夫只正の女 三津屋村大庄屋 一色丑之助重次 室は寛永三年三月十九日没 墓は栄妙桂大姉 三蔵院

二男 重次 1627年没 病死

三津屋村代官 初代 三津屋村大庄屋 光照道慶居士 享年二十五歳 一色六助重政

嫡男 重政 1614年没

初代 周敷村大庄屋 一色市兵衛 柳之進 1659年没

周布村吉田 城徳 1645年没

三男 重昌 1665年没

二代 三津屋村大庄屋 一色新兵衛 二男 重明 1658年没

重信 重広（周布村居住）（新居郡荻生村居住）

重種 重行 重武 重清 重長 重好 重之 重持 久助の父 ↑明理川系 重成 重興 重賢 重兵衛 丑右衛門 庄右衛門 重吉 安重 女 重益 半左衛門 法師 女 重二 三津屋・野島屋 榮舜（眞光寺住職） 春國照鷹（正法寺住職） 重用 七右衛門

善右衛門 宗左衛門 清左衛門

重次系(2)別紙参照

重次系(1)別紙参照

木屋二代 喜右衛門 木屋三代 喜惣兵衛 木屋四代 喜左衛門 作右衛門（福島屋） 又兵衛 徳兵衛 小松一色の祖 喜左衛門 作右衛門 重元 大和屋の祖 重俊 重春

重直系(1)別紙参照

重直系(2)別紙参照

重治 重傳 平二郎 重次 平右衛門

重直系(3)別紙参照

重直の長女は、二神善右衛門の妻 延寶三年七月三十日没 墓は水取

重次の三男重昌は、二代 周敷村大庄屋 一色市兵衛重昌 三代 安重吉 弥兵衛 四代 好重 弥兵衛 五代 祥重 半左衛門 六代 重秀 半左衛門 七代 義重 政左衛門 八代 熊八 和左右衛門 九代 太良九郎 可範（九代が最後の庄屋） 十代 半六郎 範魚 十一代 平一郎

重次の二男重明は、一色大三郎重明 後に治兵衛 十一月十三日没 万治元年十一月十日没 翁除心居士 室は壬生川の稲井助兵衛 天球泰鑑大姉

重直の三男は、一色佐左衛門重勝 周敷村三谷庄屋の祖 延寶三年五月十日没 享年七十六歳 了阿住心居士 墓は密乗院 室は横田村大庄屋越智七郎 左衛門通俊の女 承応二年十一月二十三日没 雪嶺壽白禪定尼

重直の二女は、北条庄屋塩見五左衛門に嫁がす。正徳五年十一月二十日没 墓は長福寺

重元は、二神善右衛門重光 慶長十九年一色党が大阪城入場の為の三津屋港出港に遅れた善右衛門に重次は兄重直の娘を娶らせ一色重元とした。ところが元和元年の夏の陣に重明が病の為出陣しなかったので、重明が重次家を継ぐことになり、善右衛門は本姓に復し三津屋に住む。寛文三年一月三日没 享年九十二歳 墓は水取

天正８年(１５８０年)、戦国武将一色右馬三郎範之(後の一色右馬三郎重之公)は丹後国宮津城(現・京都府宮津市)の落城前に外祖父である河野通泰(村上通泰)との縁により、子の重直、重次(６歳の双子)、家臣赤澤某、伊藤嶋之助、佐和小十郎等十余名を連れ、豫州宇摩郡へ来た。

一族は当時新居郡の旗頭であった高峠城(高外木城・タカトキ)石川通清氏の食客となり新居郡荻生村に居住。その後、桑村郡旦ノ上村へ居住。そして、旦ノ上村の青野六太夫只正の娘を重次の嫁に迎え縁者となった。

天正１８年(１５９０年)、摂津麻田藩青木一重の代官となっていた武士重之公は、命により古城に居た周敷郡北条村の地頭越智勘左衛門を討って移り住み、そこを「三ツ屋」と称した。

又、文禄２年(１５９３年)５月１３日一色右馬三郎重之公は代官となっていた次男の武士重次、嫡男の武士重直らと共に周敷郡周敷村三谷城主の荒井藤四郎考宣(ナリアキラ)を討った。

（秀吉の朝鮮出兵の軍費の為か、新領主による過酷な年貢の取立てがあったようで、一揆を企てた三谷城の荒井氏を攻め滅ぼした。道前一揆である）

そして、重之公の嫡男である重直が三谷城主となり、重直は周布、重次は三津屋を治めた。

重直　一色右馬助 後に喜兵衛と称す（法名 元眞宗廣居士 寛永１６年(1639年)９月７日卒）

重次　一色丑之助 後に弥兵衛と称す（法名 盛月閑光居士 寛永４年(1627年)７月２２日卒）

その後、一色家は三津屋村･周布村･壬生川村･明理川村の四か村で大庄屋を務めた。